

きみにもできるよ
エリー

第1章 プロローグ

オルファーク王国の最後の兵士が倒れ、「エレクトロ王国万歳！」の大合唱が起こる。
オルファーク王のもとに伝令が駆けつけ、戦線崩壊の一報を告げる。

「もはやこれまで」

がっくり肩を落とすオルファーク王。

若い兵士が告げる。

「ローゼリア姫様登場～！」

薔薇色の瞳に、薔薇色の美しい長い髪を結い上げたローゼリア姫が、青白い顔をして父王のもとに駆けつける。

「父王様、わたくしお嫁に参ります。どうぞ和平条約をお受けください」

よろめくローゼリア姫を支えるオルファーク王。

「そんな弱った体では、とても長旅に耐えられまい。死んでしまうだろう」

「わたくしの命など惜しくはありません。国の平和こそが何より大事です」

「しかし、ローゼリア」

「わたくしが死ねば、再び和平条約が破られるかもしれません。しかし、時間を稼ぐことはできます。どうぞ国を建て直し、再戦の時をお待ちください」

ローゼリア姫を抱きしめるオルファーク王。

大臣が一步前に歩み出る。

「オルファーク王様、いい考えがございます」

顔を見合わせるローゼリア姫とオルファーク王。

第2章 変転

オルファーニュ王国は、大陸の南端にある食料の豊かな国。

工業国のエレクトロ王国が、食料確保のために攻めてきて、圧倒的武力を前に戦線は壊滅してしまう。

停戦の条件は、オルファーニュ王国第三王女ローゼリアを、エレクトロ王国第三王子パリスに嫁がせ、婚姻関係を結ぶこと。

しかし、先月から原因不明の病のため、ローゼリア姫は床に伏せていた。このままでは余命3ヶ月と宣言を受けている。

サフィール家は、中流貴族で、華やかな功績もなく地味に生きていた。

サフィール家の長女サーニャ16歳は、まだ社交界デビューを果たしていなかった。引っ込み思案な性格で、一人、タロットカードで未来を占い過ごすのが日常だった。

灰色のドレスを身にまとい、薔薇色の瞳を伏せ、ふさふさと垂れた薔薇色の髪の毛をかき上げるサーニャ。クロスを取り出し、整えられた机に広げる。タロットカードの束を手にとると、祈りをささげ、クロスの中央に置いた。そして、カードの束を右手で崩す。そのまま両手で時計回しにかき混ぜ、束ねてカットし、上から6枚脇にのぞくと、7枚目のカードを1枚引いた。

「ワンドの8、思いがけない変化や偶然によって、物事が急速に動き出す」

カードを手に取り、胸に当てるサーニャ。

「なんだろう。胸がドキドキしてきた。嫌な予感がする」

扉の外からサーニャの父と母、サフィール氏とサフィール夫人が争う声が聞こえる。驚き立ち上がるサーニャ。カードがバラバラと床に散らばる。

「サーニャ、部屋にいるね。大切な話がある。入るぞ」

サフィール氏とサフィール夫人が部屋に入ってくる。

「戦争の話は聞いているね。これは国の一大事だ。よく聞きなさい」

うなずき、身構えるサーニャ。サフィール夫人がサーニャに駆け寄り肩を抱き寄せる。

「そんな大役サーニャには無理ですよ。わたしが断ってきます」

「断れる問題ではないのだ。駄目になればこの国そのものが危ない。個人的な感情は捨てる時なのだ」

「でもあなた」

「お前は少し黙っていなさい」

サーニャの前にひざまずき、手を取るサフィール氏。

「サーニャ、病身の姫様に代わって、お前がエレクトロ王国へ嫁に行くのだ。できるね」

「お父様、そんなこと急に言われても」

「そうですよあなた、誰だって戸惑うに決まっています」

「ことは急を要するのだ。この家にとっても出世が約束され名誉なことなのだ」

「あなたは娘の生涯より家の方が大事なんですか!？」

「もちろん娘はかわいい。しかし、秘密を知ってしまった以上、ただでは済まない。もう後戻りはできないのだよ。分かるねサーニャ」

黙って散らばったタロットカードを拾うサーニャ。ワンドの8を見つけて、胸に当てる。

「一日だけ待ってもらおう。その間に決心をつけなさい。いいね」

部屋を出て行くサフィール氏。

「わたしが何とかしてあげるから、心配しなくていいのよ」

父親の後を追うサフィール夫人。

一人残されたサーニャは、束ねたタロットカードを胸に当て祈り続けた。

「どうして、これがすべて夢でありますように」

手を滑らせ再び床に散らばるタロットカード。

第3章 訪問者

夕食の時間になっても、サーニャは部屋に閉じこもったままでてこない。落ち着かず、部屋中を歩き回るサーニャ。タロットカードに手を伸ばし、もう一度一枚引きで占いをする。出たのは、カップの4の逆位置。意味は、新たな関係、必要に迫られて動かざる得なくなる。

「逃れられないという意味なのかしら？ でも展望は悪くない」

ノックの音が響く。

「サーニャお嬢様、お客様がいらっしゃいました。お年を召した女の方です。お会いになりますか？」

「わたしにお客様なんて珍しい。こんな日に限ってどうしたのかしら？」

「こちらにお通ししますか？ 客間にいらっしゃいますか？ 会うまで帰らないとおっしゃっています」

「ここで会います。通してください」

タロットカードを片付け、身支度を整えるサーニャ。

再びノックの音が響く。

やさしそうな老女が入ってくる。

「こんにちはサーニャさん。突然お邪魔してごめんなさい。実はあなたにタロットで占ってもらいたい人がいて、是非来てほしいの。今から一緒に出かけられないかしら？」

「わたしに占い？」

「ええ、とても上手だと噂になっているわ。困っているわたくしの主人を助けて欲しいの。いいわね」

「今とても込み入っていていける状況にないのですが」

「わたしと来れば、その問題は解決するわ。ここで気をもんでいるよりいいと思うのだけど。明日には答えを出さなければならないのでしょうか？」

「どうしてそれを？」

「来てくれるわね？」

うなづくサーニャ。タロットカードとクロスと本を鞆に詰め込み、老女の後についていく。

第4章 二者択一

裏口に止められた馬車に乗り、町外れの教会にたどり着くサーニャ。

教会の奥の客間にたどり着くと、薔薇色の髪をした女の人が待っていた。

立ち上がり、サーニャを迎える薔薇色の髪の女。

「呼びつけてごめんなさい。どうぞわたしの未来を占ってください」

「どのようなことが知りたいのですか？」

「それはあなたが一番よく知っているのではなくて？」

「どういう意味ですか？」

「本当にわたくしと同じ髪の色、瞳の色なのね。顔もどこことなく似ている」

「あなたは誰？」

「わたくしはローゼリア。オルファーニュー王国第三王女です」

「王女様！」

ローゼリアの前にひれ伏すサーニャ。

「王女だからといって遠慮することはないわ。さあ、占って」

「ええでも、タロットはYesかNoかで答えられるような具体的な質問でなければ、うまく占えません。具体的にどのようなことを占えばいいのでしょうか？」

「ではあなたがわたしの身代わりになって、結婚してくれるかどうか知りたい」

「それは……」

「タロットの結果が悪かったらわたくしもあきらめるわ。だからあなたも、自分が信じる占いが示す未来を受け入れてください」

サーニャの瞳をじっと見つめるローゼリア姫。思わず背を向けてしまうサーニャ。サーニャの腕を取り、懇願するローゼリア姫、ふらついて座り込んでしまう。

「王女様、大丈夫ですか？」

「わたくしのことは心配しないで。どうかお願い。自分の腕を信じて、未来を託してちょうだい」

「わかりました。やってみます」

サーニャが机にクロスを広げる。

「集中力を高めるために、手を洗いたいのですが」

手を叩くローゼリア姫。

「水を持ってきてちょうだい」

老女がたらいに水を入れて運んでくる。袖をまくり、ひじまで水ですすぐサーニャ。

向かい合わせで椅子に座るサーニャとローゼリア姫。

「では、二者択一という占いをします。左が身代わりになって結婚する場合、右が身代わりにならない場合とします。どちらの未来の方がいいのか比較するために占います」

サーニャがカードの束をより分ける。

「大きな決断なので、大アルカナ22枚を使って占うことにします。展開するカードは5枚。V

の字に並べていきます。最初に一番下に置くのは質問者の現状、次に左斜め上に置く2番目のカードは結婚した場合の現状、2番の反対側に置く3番目のカードは結婚しない場合の現状、2番目のさらに左上に置く4番目のカードは結婚した場合の未来、4番の反対側に置く5番目のカードは結婚しない場合の未来とします。それでは占っていきます」

0番から21番まで並べられたカードを胸に当て祈り、机の上に置く。右手で崩し、両手でかき混ぜ、カードをまとめてカットする。上から6枚脇に避けて、説明どおりVの字に並べ、1番から順番にめくっていく。

「1番目は女帝の逆位置。甘ったれ、共依存など、自立できない様子を表します。2番目は愚者の逆位置。無計画さを表します。3番目は悪魔の逆位置。悪い状況から抜け出す。4番目は吊るされた男の逆位置。ダメなものはダメと達観することで道が開ける。5番目は塔の逆位置。問題を先送りせず、粘り強く取り組むべき。あるいは必然的崩壊を表します」

「サーニャ、あなたならどちらの未来を選ぶの？」

「どちらも厳しさがありますが、より悪いのは結婚しなかった場合でしょう。崩壊は免れません」

「では、承諾してくれるのね？」

「それは……」

じっとカードを見つめるサーニャ。カードの上に手をかざし、目を閉じる。

「自分の腕を信じて、決断してちょうだい」

立ち上がり、サーニャの肩に手を置き懇願するローゼリア姫。目を開け、うつむくサーニャ。

「他に道はないのかもしれませんが。お引き受けします」

「ああ、よかった」

馬車で、お城に移動するサーニャとローゼリア姫。

「よく決心してくださいました。本当にありがとうございます」

「わたしに王女が勤まるのでしょうか？」

「今から旅立つまであなたが王女、わたしがサーニャとして同じ部屋で暮らします。できることはなんでもします。なんでも言ってくださいね」

「はい、ローゼリア姫様」

「いいえ、わたくしはもう王女ではありません。あなたが王女、わたしはサーニャです。サーニャと呼んでくださいね」

「はい……サーニャさん」

「さあ、着きました。あなたの服をわたしにください」

「服を？」

「ええ、あなたが王女になるのですから」

老女に付き添われ部屋に入り、灰色のドレスを脱ぎ捨てると、ローゼリアの赤いドレスを身にまとい、髪を結い上げてもらうサーニャ。

「よくお似合いです。どうぞご覧ください」

鏡の前に立つサーニャ。艶やかに変身した自分の姿に驚く。

「これがわたし!？」

「よくお似合いですよ。こちらの服は持っていきますね」

老女が灰色のドレスを持って去っていく。一人残されたサーニャは、鏡に映る自分に見入る。

お城のローゼリア姫の部屋で、ローゼリア姫のベッドで眠るサーニャ。部屋の隅に置かれたソファーベッドでは、不調に苦しむローゼリア姫が横たわっている。

「ローゼリア姫、いいえ、サーニャさん。部屋には誰も来ないので、ベッドまでかえる必要はないんじゃないですか。お加減が悪いのでしょうか？」

「わたくしはあなたに全て託したのです。これでいいのです」

せき込むローゼリア姫。ベッドから降りて、ローゼリアの背中をさするサーニャ。

「ありがとう。でも王女はそんなことはしません。戻ってください」

「でも」

「王女も意外と大変でしょう？」

笑いかけるローゼリア姫。釣られて思わず笑ってしまうサーニャ。

第5章 母

翌日の朝、赤いドレスに着替えたサーニャと、灰色のドレスに着替えたローゼリア姫が、朝食にパンと紅茶とオレンジを食べていた。食べながらローゼリア姫が、サーニャに語り始めた。

「パリス王子は19歳、ローゼリア王女は17歳、年齢的には釣り合っている。とてもやんちゃでイタズラ好きの元気な青年らしいですわ」

「わたし、いつも一人でいたので、男の人と話したことがなくて。何を話したらいいんでしょう？」

「得意のタロットで占って差し上げたらよろしいわ。とてもお上手なんですもの」

「そんなことはありません。母には現実を見なさいっていつも叱られてばかりいます」

「叱るなんてどうしてかしら？ 未来を占えるなんて素敵だと思うけれど」

「母にはいつもお前には無理と言われていました。今度のことも、母は反対していました。そんな母が嫌なんだけど、どうしていいのかわからなくて結局いつも頼ってしまう」

「でも、あなたはわたしのところに一人で来て、自分の腕を信じて決断してくれた。自分で第一歩を踏み出したのよ。すばらしいじゃない」

老女は慌てて入ってくる。

「サフィール夫人がサーニャ様を探しに城にやってきました。娘を取り戻すまで帰らないと言っているそうです」

「お母さまが！」

強い口調できっぱり宣言するローゼリア姫。

「サーニャは身代わりを断り修道院に入りました。ここにはいないと伝えなさい」

「そういいましたが、娘に会わせると大騒ぎをして、兵士に取り押さえられ、今は牢屋に入られています。このままでは罪に問われてしまうでしょう」

「母を助けに行かなければ」

「待って、今のあなたはローゼリア姫なのよ。彼女はお母さまなどではない。行ってはいけません」

サーニャを引き止めるローゼリア姫。

「わたしがローゼリア姫として母に会って追い返します。だから行かせて！」

「いくら似ているとはいえ、実の母親には分かってしまうでしょう。行かせるわけにはいきません」

「母に言いふらされる方が問題ではありませんか？」

「兵士が言いふらせないように口を封じてしまうでしょう」

「そんな酷い。ローゼリア姫様お願い、母に会わせて。必ず追い返してみせます。わたしを信じて！」

にらみ合うサーニャとローゼリア姫。

「いいでしょう。あなたを信じます。案内しなさい」

老女の後についていくサーニャ。心配そうに見送るローゼリア姫。

牢屋に入れられたサフィール夫人が、叫び声を上げながら柵を揺らして大騒ぎしている。

「サーニャ、サーニャ、サーニャ〜」

赤色のドレスを着て、薔薇色の髪を結い上げたサーニャが老女に連れられ、姿を現す。

「サーニャ、お前その格好は！」

「わたくしはサーニャなどではありません。オルファーニュ王国第三王女ローゼリアです。控えなさい」

「わたしには分かっている。大丈夫だからわたしのところへ戻っておいで」

サーニャに手を伸ばすサフィール夫人。しかしサーニャは、夫人の手を振り払う。

「無礼を言うと許しませんよ。サーニャさんは、断るお詫びに修道院に入られました。ここにはいません。もう両親には会わないと言っていました」

「そんな話、嘘よ。作り話よ！」

「これ以上騒ぎ立てするとあなたの命が危なくなります。どうぞ静かにお引取りください」

「娘を目の前にして、のこのこ一人で帰れるものですか！ 絶対帰りません！」

「あなたの娘は自立されたのです。自らの意志で第一歩を踏み出されました。尊重してあげたらいかがですか？」

「お前、わたしに向かってよくもそんな口が聞けたものだ。なんにもできないお前のためになんでもしてあげたわたしに向かって、よくも、よくもそんな口を！」

「これ以上、お話することはありません。黙って帰るか、殺されるか、好きな方をお選びなさい」

すばやく立ち去るサーニャ。

「待ちなさいサーニャ、待って！」

伸ばした手を、虚しく振り上げるサフィール夫人、座り込んで泣き声を上げる。

第6章 勝負

数日後、婚礼のためにエレクトロ王国にサーニャが旅立つ。見送るローゼリア姫。

「わたしは城を出て修道院に入ります。ここでお別れです」

「わたし一人で敵国に行くのは不安でなりません」

「大丈夫、手紙を書きます。困ったことがあったら何でも相談してね」

「ありがとうございます……サーニャさん」

手を取り合うサーニャとローゼリア姫。

サーニャが馬車でエレクトロ王国に移動中、路上に立つ青年たちに出会う。

「お嬢さん、ここは通れない。他を当たってくれ」

剣を構える青年たち。

「剣の腕でわたしにかなうものはいない。殺されるのが嫌なら立ち去るがいい！」

護衛の兵士が迎え撃つ。しかし、青年たちに押され、どんどん切り倒されていく。

馬車の中で頭を抱えて丸くなるサーニャ、思わず大声で叫ぶ。

「誰か助けて！」

「助けてやってもいい」

青年の一人が進み出てきて、サーニャの前に立つ。

「このまま黙って帰れば命だけは助けてやろう」

「帰ります。帰りますから許してください！」

サーニャが懇願してひざまずく。青年が高笑いする。

「お前本当に女王なのか？ そんなに簡単に引き下がるなんて、国を背負う誇りはないのか！」

「女王と知っての行動なんですか？ 目的はいったい何？」

馬車に乗り込み、サーニャを追い詰める青年。床に鞆が落ちてタロットカードが散らばる。

「それはなんだ？」

「タロットカード。占いの道具です」

「ほお、女王のくせに占いをするのか？」

「このカードで勝負しよう。勝ったら通してやらないこともない」

「タロットは占いの道具で勝負するものではありません」

「そんなこと知らない。何か考えろ！」

床に散らばったカードを集めるサーニャ、束から1枚を取り出し青年に掲げて見せる。

「このカードはカップの9です。ウィッシュカードと呼ばれています。1枚ずつ交替に引いていて、このカードを引いた方が勝ちというのはどうですか？」

「いいだろう」

馬車から降りて、向かい合って座るサーニャと青年。

サーニャがクロスを取り出し、束にしたタロットカードを右手で崩し、両手がかき回す。バラバラになったカードを束ね、3つの山を作る。

「好きな順番で束ねてください」

青年が、カードの束を重ねて一つにする。

サーニャが、カードをずらし、横一列に並べる。

「お前から取っていい」

サーニャが1枚目のタロットカードを中央あたりから引く。現れたのは運命の輪のカード。

続いて青年が一番右から1枚引く。現れたのは戦車のカード。

3回目にサーニャが引く。現れたのはカップの9。

「お前の勝ちだ。運のいいやつだ」

胸をなでおろすサーニャ。

「ようこそわが国へ。俺はエレクトロ王国第三王子パリス。お前の夫になる男だ。余興は楽しんでもらえただろうか？」

「余興ですって！ こんなひどいこと！」

高笑いするパリス。

「俺はこういう男だ。生涯寄り添うつもりなら慣れろ。楽しめ！」

立ち上がるパリス。

「俺は先に行く。護衛の兵士とともにゆっくり来るといい！」

馬で去っていくパリス。

「酷い男。あんな男の妻になるだなんて！」

サーニャが険しい顔で馬車に乗り込む。

第7章 ホロスコープ

結婚式は、国の威信を示すため、盛大にとりおこなわれた。

純白のドレスに身を包んだサーニャは、美しく輝いていた。

隣には、黒いタキシードに身を包んだパリスが並ぶ。

神父に誓いのキスを求められて、顔を背けるサーニャ。サーニャのあごをつかみ、無理矢理口づけするパリス。二人の様子を不審そうに見つめるエレクトロ王が、エレクトロ王妃に耳打ちする。

「あんなに元気なのはおかしい。何かある」

「調べさせたらいいわ」

「ああ、死んでこそ価値のする女だ」

新郎新婦が誓約書にサインをする。立ち上がり拍手する人々。

夜になり、寝室に二人きりになるサーニャとパリス。

「今夜からお前は俺のものだ」

「絶対嫌です。指一本触らせない」

「俺たちはもう夫婦なんだ。離れられない」

迫るパリス。逃げるサーニャ。

「いいだろう。得意の占いで俺のことを当ててみる。見事当てられたら言い分を聞かないでもない」

「タロットは具体的な質問に対する答えを与えてくれるものです」

「そんなこと知らない。何とかしろ」

パリスが椅子に座る。サーニャにも座るように促す。

「では、78枚使ってホロスコープを実施します。運勢を見ます。期限は1年とします」

サーニャが鞆からクロスを取り出し机に広げる。タロットの束を取り出し、カードの順番を確認する。

タロットを胸に当てて祈るサーニャ。クロスの真ん中にタロットを置き、右手で崩して、両手で時計回りにかき混ぜる。3つの山を作り、順番を入れ替えカットする。

6枚脇にどけて、7枚目を左中央の1番の位置置く。続けて、ひし形になるように右斜め下に2、3とならべ、4番目を中央の下に置く。続けて右斜め上に5、6と並べて、7番目を右中央に置く。そのまま続けて8、9と左斜め上において10番目を上の中央に置く。さらに11、12と左斜め下においてひし形を作り出す。最後に中央に13番目を置く。

並べたカードを順番に示しながら語りだすサーニャ。

「1番は質問者自身の状態。2番は普段使う金銭の状態、物質運。3番は基礎的な勉強、国内旅行、兄弟。4番は家庭、不動産、父親。5番は恋愛、娯楽、子ども。6番は健康運、ペット、収入を得るための仕事、部下。7番は結婚運、配偶者、協力者、人間関係。8番はセックス、遺産、貯蓄状況、死に関して。9番は外国、海外旅行、専門的な勉強。10番は仕事、名声、

母親。11番は友人関係。12番は潜在した物事、災難。13番は全体運です」

「それで結果はどうなんだ？」

「1番は節制の逆位置。2番はカップの4。3番はワンドの3。4番はカップの6。5番はワンドのエース。6番はカップの5。7番はワンドの6。8番はソードの10。9番は戦車。10番は女帝。11番はカップの7。12番はソードの8。13番はカップの2です」

「意味は？」

「1番の節制の逆位置は質問者自身。惰性で動き、疲れています。2番のカップの4は金銭状態。停滞しています。3番のワンドの3は学習や旅行。発展途上ですが良好です。4番のカップの6は家庭で……」

「どうした？」

「良好です。過去を振り返ることで、未来が見えてきます」

「この結婚はよいというのか？」

「5番は恋愛のカードで新しいことが始まる予感、7番は結婚のカードで遅からず朗報がもたらされるでしょう。……どちらも良好です」

「結論から言うといいということか？」

「全体を現す13番はカップの2……心が通じ合い、相互の間に深い共感と交流が生まれるでしょう」

「はっはっはっ！ 俺とお前の間が親密になるというのか？」

「わたしはそうは思いませんが、占いではそうでています」

「面白い！」

「面白くないわ。そんなことありえない」

「自分の腕を信じないのか？」

「占いは信じているでも、あなたと親密になるなんてそんなことありえない！」

「俺は意外とお前が気に入っている」

「わたしなんかのどこが？」

「気に入ることに理由なんかない。そう感じるだけだ」

「あなたって本当に非合理的な人ね」

「お前が俺に慣れさえすれば、すべてうまくいく」

パリスが立ち上がり、扉へ向かう。

「今日は一人で寝るといい。結ばれるのはお前が俺を受け入れからにしよう！」

「そんな日はこないわ」

「それもいい。しかし子の産めない王女は要らぬと言われるだろうな」

立ち去るパリス。一人残されたサーニャは、クロスに展開されたタロットをぐちゃぐちゃにかき混ぜようとしてやめる。

「どうしたらいいの？ わたし、どうしたらいいの？」

サーニャが8番目のカードに目を留める。

「最悪の状態。なんだろう。悪い予感がする」

タロットを集めて、順番どおりに並べなおすサーニャ。

第8章 パリスの気持ち

翌日、サーニャが目を覚ますと、ベッド脇にパリスが座っていた。驚き身を引くサーニャ。

「やっと起きたか。出かけるぞ。支度しろ」

「こんなに早くからどこへ？」

「黙ってついてくればいい」

意気揚々と馬車に乗り込むパリス。サーニャもいやいや支度をして、馬車に乗り込む。

城を出て、1時間ほど走り、森に到着する。

「ここからは外は見るな」

パリスが、サーニャの目に目隠しする。

「わたしをどうするつもり？」

「心配要らない。見せたいものがあるんだ」

馬車が止まり、目隠ししたままパリスに手を引かれて外に出るサーニャ。

「もういいだろう」

目隠しをはずすと、そこには真っ赤に色づいた楓たちが広がっていた。

「きれい」

サーニャが思わずため息を漏らす。

「お前の髪の色と同じ薔薇色だ」

パリスに手を引かれ、サーニャが楓の間を歩く。足元で落ち葉がカサカサと音を立てる。

「お前は敵国に一人で乗り込んできた。俺以外味方はいない。だから俺を信じて頼れ。そうすれば幸せにしてやる」

パリスがサーニャを引き寄せ、瞳をじっと見つめる。思わず顔を背けるサーニャ。

「俺を見ろ。目をそらすな」

サーニャが顔を上げ、上目遣いにパリスを見つめる。

「会ったばかりのわたしに本気で言っているの？」

「王族の結婚とは政治で決まるものだ。本人の意思は関係ない。しかし、それでも愛し合うことはできる。幸せになることだってできるはずだ」

「パリスあなたって」

「初めて名前を呼んでくれた。俺もお前をローゼリアと呼ぼう」

ひざまずき手の甲にキスするパリス。嘘をついているサーニャは、胸に痛みを感じる。

第9章 疑惑

数日後、ローゼリアからサーニャに手紙が届く。

ローゼリア様、お元気ですか。

わたくしはもう長くは生きられないと思います。

でもあなたが生きていてくれれば国は救われます。

どうか国を救ってください。

ローゼリアの手紙を読んだサーニャは、涙を流す。心の中で祈りを捧げる。

ローゼリアが、一人で歩いていると後ろから声をかけられる。

「サーニャ・サフィール」

思わず立ち止まってしまうサーニャ。振り返るとエレクトロ王が立っている。

「お前の本当の名前だ。正体はもう分かっている」

「なんのことでしょう。わたくしは存じません」

「偽者の女王を送ってきたことが分かれば、オルファーニュ王国は信頼を失うだろう。暴かれたくなかったら、自分から出て行け。失踪するのだ」

「わたくしは本物の王女です。ローゼリアに間違いございません」

「ローゼリアは体調不良で伏せていたはずだ。そんなに元気なはずがない」

「なぜそれを？」

「わが国の情報収集力を甘く見るな。それくらい知ることはたやすい」

「あなたが原因だからじゃないんですか？」

「何を言う。言いがかりはよせ」

パリスが近づいてくる。

「ローゼリアと父上、どうしたのですか？」

「なんでもない。花嫁にご機嫌伺いしていたところだ」

「ええ、ご心配なく。パリスとはうまくやっていますと答えていたところよ。いきましょー」

パリスの手を引き、立ち去るサーニャ。サーニャの後ろ姿をにらみつけるエレクトロ王。

寝室でエレクトロ王が、エレクトロ王妃に話しかける。

「偽者のローゼリア姫が生きていては国を乗っ取る理由がない。殺してしまえ！」

「それはなりません。殺せばこちらに汚点がつきます。攻撃されたふりをして反撃仕返せばいいのです。戦争状態になれば、たとえ偽者でも交渉を有利に進めるための取引に使えます」

廊下で二人の話を持ち聞きしてしまうパリス。

パリスに嘘をついていることが苦しくなるサーニャ。本当のことを言いたいが、言えない。

「全てを託してくださったあの方を裏切ることはできない」

パリスが部屋に入ってくる。

「お帰りなさい。どこへ行っていたの？」

黙ったままサーニャの前に立ったパリスが、サーニャの瞳をじっと見つめる。思わず目をそらしてしまうサーニャ。

「俺に隠していることはないか？」

「別になにも隠してなんていないわ」

「嘘だ。隠している。言ってくれ。俺には何でも言ってくれ。悪いようにはしない」

パリスがサーニャの肩をつかみ、激しく揺らす。腕を解き、パリスから離れるサーニャ。

「ローゼリアの命が危ないんだ。どうか本当のことを言ってくれ。そうすれば俺が守ってみせる」

「どうしてわたしの命が危ないの？」

「それは言えない。だが俺を信じてくれ」

「わたしも、わたしを信じて欲しい」

「俺はお前が好きなんだ。真実を知ってもこの気持ちは変わらない。言ってくれ」

「なんのことだか分からないわ」

「どうしても言わないつもりか？」

「あなたこそ教えてくれないの？」

対立するサーニャとパリス。

「あまり時間がない。早く覚悟を決めて話してくれ」

パリスが立ち去る。残されたサーニャは、力が抜けて座り込んでしまう。

第10章 同盟

オルファーニュ王国が、近隣諸国と同盟を結ぶ。脅威を感じたエレクトロ王国が、ローゼリア姫として人質になっているサーニャを拘束する。エレクトロ王国に進撃すれば殺すと条件を出した。

サーニャを助けるため必死に抵抗するパリスが、エレクトロ王に救済を訴える。

「あちらが先に仕掛けてきたのだ。わたしに訴えるべきではない」

「しかし父上、ローゼリアは俺の大切な妻です。どうか助けてください」

「くどい。下がるがよい」

「父上、父上～！」

パリスが兵士に取り押さえられ、エレクトロ王の前から連れ出される。

得意のタロットも取り上げられて、牢獄に閉じ込められたサーニャが、一人静かに座っている。

「わたし怖い。でも最後までやり遂げて見せます」

サーニャが小声でつぶやくと、パリスが忍び込んでくる。

「ああ、パリス会いに来てくれたのね。嬉しい。でもあなたまで巻き添えになっては大変。去ってください」

「本当のことを言ってくれ。そうすれば必ず守るから」

パリスが床に膝をついてサーニャに懇願する。しかし、ローゼリアとして死ぬ覚悟を決めたサーニャは、首を横に振る。

「さようなら、パリス。わたしは大丈夫」

言葉とは裏腹に、涙がほろほろ流れる。思わず叫んでしまうパリス。

「サーニャ！」

「どうしてその名を！」

「きみが本当は誰かなんてどうでもいいんだ。どうか僕にだけは本当のことを言ってくれ」

「ごめんなさい。自分の命をかけてわたしを信じて託してくれたあの人を裏切ることはできない」

「俺の頼みでもか？」

「ああ、パリス。あなたのことは本当に愛しています。それだけは信じて」

「いいだろう。ローゼリア。きみはローゼリアだ。ローゼリアとして一緒に生きよう」

「ありがとう、パリス」

抱き合うサーニャとパリス。

エレクトロ王と王妃が見守るなか、サーニャが断頭台に連れ出される。

「待て！」

武装したパリスがエレクトロ王の前に現れ、剣を抜く。

「ローゼリアは僕の妃だ。たとえ敵国の人間であっても殺すことは僕が許さない。もし、どうしても彼女を殺すというのなら、僕を殺してからしろ！」

剣を振り下ろすパリス。近衛兵が応戦する。数に圧倒され、取り押さえられてしまう。エレクトロク王国の命令が響く。

「わたしに歯向かった、パリスも処刑せよ！」

並んで断頭台にかけられるサーニャとパリス。

「パリス、あなたまで死ぬことないのに」

「いいんだ。ともに死ねるなら、なにも怖くないさ」

エレクトロク王が命令を下す。

「殺せ！」

そこへ伝令が現れる。

「近隣諸国と同盟を結んだオルファーニュ軍がエレクトロク王国の国境を突破しました。状況は極めて不利です。停戦は、ローゼリア姫の命と引き換えです」

「処刑を中止せよ」

解放されるサーニャとパリス。互いを気遣い、抱き合う二人。

第11章 使者

元の部屋に幽閉されるサーニャとパリス。パリスが、サーニャの額に口づけする。

「オルファーニュ王国の条件を飲めば、ローゼリアとはお別れだ」

「パリスにだけは、本当のわたしを知っていてほしい」

「サーニャ。それが本当の名前だろう？」

迷いながら、小さくうなずくサーニャ。

「国を捨てて、二人で逃げよう」

「それができたらどんなにいいだろう」

「このまま偽りのローゼリア姫を演じ続けるつもりなのか？」

「今さらやめることはできない」

「エレクトロ王国には本物のローゼリアを知っている人はいない。嘘がばれる心配は少ない。しかし、残れば命に危険が及ぶ。オルファーニュ王国に帰れば、やがて気づく人が出てくるだろう。とどまることも、戻ることもできないなら、逃げ出す以外ない。僕は剣の腕で、きみは得意のタロットで食べていけばいい」

「わたしにそんなことできるかしら？」

「僕に決断できたんだ。きみにもできるよ」

「パリス、あなたを信じる！」

抱き合うサーニャとパリス。

そこへ、フードをかぶった使者がやってくる。フードをとるとなんと、ローゼリアだった。

「生きていたなんて！！」

「長い間生死をさまよっていたけど、新種の毒薬らしいと原因が分かったことで一命を取りとめたのよ。知らせるのが遅くなってごめんなさいね」

「いいの。生きていてくれて本当に嬉しい！！」

「話したいことは一杯あるけど、時間がないの。わたしがここに残るから、その服を脱いでちょうだい」

「きっときみを追いかけるから、俺を信じて逃げてくれ」

「ええ、信じているわ」

使者の服を着て、一人で城を逃げ出すサーニャ。

第12章 エピローグ

辻占いをする薔薇色の髪の子。

お客が帰ったら、馬車にゆられて女。

剣を帯びた男が現れる。

男に駆け寄る薔薇色の髪の子。

抱き合い、口づけを交わす男と女。